

くらしの泉

加藤清正と言えば、多くの人は、「賤ヶ岳の七本槍」の一人に数えられた槍の名手で、朝鮮出兵では「清正の虎退治」を思い出すだろう。秀吉の家臣団の中では体も大きく武功派の武将として知られていたが、その一方で治水、干拓、城作りの技術に優れ「土木や治水の神様」とか「城造りの天才」とも言われている。現代的に言えば、加藤清正は城を中心にした都市計画の天才でもあった。

天正16（1588）年肥後25万石の領主に命じられた清正は、斬新的な都市計画を実施した。外敵からの侵入を防ぐために①河川の改修（毎年氾濫を繰り返す坪井川と白川の切り離し）、湿地帯を内堀にし、高台は人が居住できるように②居住地の開発、低地では③新田開発を促進した。また整備した坪井川を水運に利用し、城下町の④物資輸送を盛んにし、城下町の繁栄をもたらした。⑤農業用水路の整備にも力を注いだ。火山の噴火活動でできた阿蘇の土地は、水がすぐ地下に浸透してしまふ。清正は白川から大量の農業用水を引くために、堰や用水路を数多く整備した。

その中で特筆できるのが「鼻ぐり井手」で、清正の独創的な水利技術である。井手とは用水路のこと、水量を調節するために水路を壁で仕切る必要があるが、壁で仕切ると、阿蘇特有の火山灰土（ヨナ）が沈澱してしまふ。壁の底部中央に孔（鼻ぐり）を開け、底の水流を早く、しかも水流に回転を与えヨナが底部に

溜まることを防ぐ治水管理技術である。清正の河川改修により開墾された新田は約2万4000町歩に達した。川だけではない、有明海や不知火海の干拓にも力を注ぎ、その後の肥後の国に繁栄をもたらしている。

熊本城の築城（1601～1607年）にあたっては、清正の150回以上の城攻めの実戦経験が生かされている。通常は城のまわりに外堀内堀を構築するが、清正は坪井川を改修し豊富な流れで城を囲んだ。石垣の石の大きさや積み重ね方を構築物により変化させ、敵が簡単に登れないようにしている。もちろん「武者返し」と呼ばれる熊本城の石垣の構築は幅や奥行き、高さも過去最大規模であった。

城内のリスク管理も徹底していた。かりに敵が城内に侵入した時には、暗がりの地下通路からしか城に入れない構造（封鎖しやすい）や、本丸御殿への隠れ道（秘密通路）を複数設けるなど、実戦経験を十二分に生かした城造りを成し遂げている。これらの築城のノウハウは、全国各地の城造りのモデルとなった。

清正が城造りを命じられると「工事責任者へ」「その地を念入りに調べよ、特に川守りや年寄りの意見を多く集めよ」と命じた。今で言うビッグデータの収集と活用である。技術だけではない。城造りには男女を問わず多くの農民が動員されたが、築城の大部分は農閑期に行なわれ、しかも給金をきちんと払ったため民衆は喜んで清正に協力したのであった。

水に流せない 水の話 ⑧ 吉村和就

治水の神様と呼ばれた清正公

加藤清正というと、朝鮮出兵しか知りませんが、治水や土木方面の才があったそうです。それが生かされたのが熊本城。再建がんばれ～!

よしむら かずなり・グローバルウォータージャパン代表、
国連環境アドバイザー。日本を代表する水の専門家。一人。
『水ビジネス——110兆円水市場の攻防』（角川書店）など著書多数。

イラストレーション／白井裕子

